

I 次の文章を読んで、後の問い(問1～14)に答えよ。(配点 75)

物に対する執着心

明治九年十一月二十九日夜、京橋数寄屋町から発した火事は、強い北風にあおられ、一瞬のうちに当時の日本橋区から築地にいたるまでをシヨウドと化した。入舟町の外人居留地をはじめ、二万戸以上が灰燼^{かいぜん}に帰したのである。その焼け跡を視察した有名なドイツ人の医学者ベルツ博士は、信ぜべからざるような光景に出会って肝^Aをつぶした。かれはそのことを「日記」のなかに書き残している。博士は何に驚いたのか。

大火の後わずか三十六時間しかたつていないのに、何とも不可思議なる国民である。日本人というのは。まだ余燼^{よぜん}が赤く、煙があがっている焼け跡に、控え目の要求なら完全に満たす「板の屋台」ともいべき家を、まるで地から生え出たごとく立ててしまった。その上、「日本人はすべての運命の打撃に対し、あのトルコ人より一層平気だということは聞いていたが——トルコ人は化け物のように鈍感^Bに、コンクに耐えるというのがヨーロッパの伝説である——、これらの罹災者^{りさいしゃ}が私に見せた光景は驚嘆のかぎりであった。小屋がけや、焼け跡の搜索にたずさわらないものは、いつものごとく喫煙にふけっている。三々五々、男、女、子供が小さな火をかこんですわり、煙草をすつたり、しゃべつたりしている。かれらの面上には悲嘆の色などあとかたさ見えぬ。私は、多くのものが、何の不運もおこらなかつたように、冗談をいい哄笑^{こうしょう}するのを見聞したのである。どこをさがしても、しおれ返った女性も、寢床を恋しがらる子供も、災禍に負けてしまっている男も、発見することができない。私は、ここまで人びとが物欲がないと、そのため、物欲の上に築かれているところのヨーロッパの文化のユニエツがまったく不可能でないかと、危ぶむ。それほど無欲恬淡^{てんたん}なのが日本人というものなのだ」と。

ところで一方、イギリスの公使オルコックは、その少し前、幕末の日本を見て、このような観察をした。

日本は精神文化——この場合は政治意識とか政治能力、さらには宗教心のことだが——は低いけれど、物質文化の程度ははなはだ高い。生産技術もたいしたもの、材料がじゅうぶん与えられたら産業革命だつて独力でやれるほどだ、と(オルコック『大君の都』)。

日本人は精神文化では高いが、物質文化では劣つていたとする私たちの考えとは正反対のような意見である。

しかし、この二人の卓越した観察者の見方は、たいへん正確で、客観的な判断だといわねばならない。二人は矛盾したことをいっているのではない。二つの意見は総合できるのだ。こうである。日本人は、生産技術では卓越した能力をもっている。だが、合理的な近代社会を築き、運営していく能力に乏しい。そのため、生産技術を發揮できる社会をつくり得ず、物質に対する執着がなく、卓越の金をもつことをいさぎよしとしない性格をもつようになった。このまま放つておくと、自力で自由競争社会をつくり、資本蓄積を遂行してゆく能力をもち得ないことにならう、と。だからこそ、このことにいち早く気がついた明治政府は、富国強兵策を強行し、国家が強力に資本家を援助する^Bいわゆる上から資本主義の建設に力をそそいだのだ、といえよう。

ところで、^Cこの二人の指摘は、現在の日本人にも、まだどうも適合するところが多いようである。

物をつくることはたしかに上手だ。しかし、「精神文明」のほうはうまくゆかない。民主主義は政治の上ではもちろん、社会的に見ても確実に根づいたとしても、順調に成長しているともいえないようである。ただ、物欲のなさという点は変わった。物質に対するあこがれは強くなった。^Dそれよりはるかに変わったのは執着心だろう。災難を受けても平気だというふうはまったくなくなった。それどころか、ちよつとした不幸にでも、ひどい目に会ったと泣きわめき、意気沮喪^{せきそう}してしまう度合いは、ベルツ博士がなげいたドイツ人などより、かえつてはるかに強くなってしまったようである。これは一体どういうことなのだろうか。

生活への反省

徳川時代の士族層は、その家族をふくめると、実に膨大な数にのぼる。幕末に日本にやって来た外人たちは、この自分はまったく何も生産せず、統治の責任ももたぬ寄生支配階級の数の多さに驚いた。ノーマンはその著『日本における近代国家の成立』の中で、日本の支配者、武士の総人口に対する比率は、五、六パーセントにのぼる。僧侶や神官を入れたらもつと多くなるだろう。フランス革命当時のフランスの支配者のパーセンテージである〇・五、〇・六とくらべると実に十倍も多い、と計算している。フランス革命は、この「わずかな支配者」の重さに耐えかねて爆発したのだが、日本の農民などが、どうしてこれほどの支配者を背負うことができたのかまったく不思議だ、というわけである。

日本の土地が豊かで、穀物生産力がヨーロッパにくらべて、たいへん大きかつたせいだともいえよう。日本の農民は辛抱強かつたともいえよう。それにしてもこう多くては、支配者たち、つまり武士はとても贅沢^{ぜいさく}はできなかつた。大殿様だつて、豪華な生活とはいうものの、フランス革命前の貴族たちの生活とくらべるなら、その物質的豊かさはたかがしれたものである。化粧品だろうが、装飾品、衣類だろうが、今日の一般^(注)のオフィsgirlの程度のものをもつた奥方やお姫様は、教えるほどの少数しかいなかつただろう。贅沢だつたのは人づかいのあらさと、家屋敷の、あまり住むには快適でなかつた空間のひろさだけのことである。支配階級のもつ物質的富は、生活を豊かに、快適にすることに關しては、ほとんど言うに足りなかつたといえよう。伝えられる商人の贅沢だつてしれたものである。日本人は物質に対する執着心がなかつたのではない。物欲に乏しく、恬淡だつたのではない。そういう心をかきたてるほどの物質がなかつたのだ。もつとはつきりいうと、そういうものへのあこがれをかきおこす見本が自分たちのまわりに容易に見つからなかつただけのことなのである。

幕末、明治初めのころの日本は、^Eいわは総貧乏だつた。ちょうど大戦末期のようなもの。空襲を受けて焼けだされても、だれもそう惜しいとは思わなかつた。戦意旺盛で気持が高ぶつていたとはいえない。自棄^{やけ}だつたことはたしかだが、それだけでもない。よい着物をもつていても着られなかつた。そんなものを喜べる時代が間もなくやつてくるなど想像もできない時代だつた。維新前後は同じ意味で豊かな物質文化の見本が未だ存在していなかつた時だつた。ということのほう大きい理由であろう。

だからこそ、物質生活が豊かになり、豊かで快適な生活の見本が、ちかくにいくらでも展開されるようになると、欲望もせきをきつたようにあふれだし、執着度もおそろしく強くなることとなつ

たのである。明治末からはそういう時代だ。もつとも、執着が強く、災害に弱くなったことが目立ち始めるのは、とくにこの敗戦後の話である。明治大正期は物欲も名誉心も強く、立身出世主義がしきりに叫ばれたが、また災難に会っても精神の打撃は少なく、自力的な回復力は旺盛だった。泣き叫び、同情と援助に依存するのはもちろん、それを強制するようになったのはごく最近のことだ。民主主義教育というより、意志の鍛練や肉体の訓練を封建的として極力排除してきた戦後教育の「効果」が現われてきたといえよう。

甲

だが、そのことよりも、私は、日本人の物質に対する欲望、豊かな生活を求める心に、いま一つ根本的に足りないところがあるのを、より強く感ぜざるを得ない。^G物欲は決して排撃すべきものではない。みんなが欲望のない聖人君主になってしまつたら、社会の発展は停頓^dするどころか、社会そのものが崩壊してしまう。禁欲主義を説く坊主や説教者は、そういう欲求は決してなくなるものだからこそ、安心して物欲を捨てると説くことができるのである。つまり、より豊かに生きようと働く人びとの社会を地盤にしてこそ、自分は働かないで欲望を排するという演説をやつて生計をかせぐことができるのだ。欲求は当然のことだ。ただそれを正しい——といつても **I** 的に正しいというのではなく——社会的に健康な方向へたえず舵^かをとつてゆく必要がある。日本人の物欲には、その「正しさ」で欠ける点がある。それは物資の蓄積、財の伝承ということに対する観念の稀薄^{きはく}さである。日本人の古文化財を守るという気持のなさは、よく指摘されるところだ。公財産に対する尊重心もおそろしく小さい。

だが、人があまり気づかぬ根本的な欠陥は、物資を蓄積し、それを子孫に伝えてゆくという観念がないことである。「子孫のため美田を買わず」は今日でも美談である。それも一つの立場だ。だが美田のような、直接の生産財ではなく、といつて現金でもなく、^eフソの愛した家、家具、道具、美術品、そういうものを大切にもちつづけている日本人のなんと少ないことか。第一、伝え得るほどのものを、骨董品^{ことうひん}以外にはほとんどもっていないということが、日本人の大部分であろう。個人や個々の家にそういう伝承物がないことは、公共的なものにも伝承物が乏しいということになる。わずかに伝えているのは寺院だけである。古都京都といつても、寺院以外に何が残っているか。寺院だけに残るものがあるというのは、ヨーロッパではみながおそろしく貧しかった中世の昔のことである。このことは、日本の固有文化が、少しも伝承されないということの基本的原因なのだ。物質的基盤がなくて、精神だけが伝承されるものでは決してないからである。それは伝承するに足るものを日本人はそれほどつくり得なかつたということでもある。現在でもそうだ。絵でも彫刻でも建築でも、私たちは三百年ののちに誇り得るものを一体つくり出しているだろうか。

ヨーロッパは、^Hこの点が日本とちがう。たとえば、ここでは花嫁衣裳^{いづちやう}が伝承される。おばあさんの、そのまたおばあさんのときから何度も着たという花嫁衣裳が、最も縁起がよく貴重なものである。指輪もそうだ。家具もそうだ。実用品でも、美術品に近くなるほどそういう傾向が強まる。このような感覚の上に、ヨーロッパの古い文化伝統がどつしりと根をおろしているのである。

「お父さんは古い」というふうに、古いという言葉が、悪い、だめになつたということと

Ⅱ

語であるのは、日本だけである。古いということはよいということなのだ。この意味

が言葉ではわかっていても実感としてわからぬというかたは、ウイスキーのオールドという言葉を考えていただきたい。

精神主義偏重の愚かさ

このようになった根本原因は、どう考えても家屋の構造にある。私たちはヨーロッパの観念を受け売りして家屋を不動産に入れている。だが、日本の家屋は、とうてい不動産といえるものではない。移動しにくいということはあるが、ちよつとの時間の間に出現し、消滅するという点では、日本の家はとうてい不動産の概念にあてはまりにくい。ヨーロッパでは、家屋をたてる時、それは永久の住居であり、集合所であり、生産場であるという意識を強くもつ。自分だけではなく、子孫にとつても、あるいは他人にとつても、そういうものだと考える。注文主も設計者も施工者もそう思う。その結果、事実できたものがそうなる。それに家屋を建てるとともに、一つの後代に残る現代の文化をつくつたという気持もある。それは富の差でなく心構えの差なのだ。

このような「永久の家屋」とともに「永久の品物」が残るといふ感覚が生まれるから、それが根底となつて、何をつくる場合でも、その心構えになることにならう。物質をつくるときだけでなく、小説を書く。論文を書く。さらには演説をする。些細な行動の例をあげれば、手紙を書くといふときでさえ、ヨーロッパ人は日本人にくらべては、時の長さといふ重みをはるかに強く感じなければならぬはずである。私たちはヨーロッパへ行つたとき、何とかれらは鈍重だと感じるものだけだ、それはヨーロッパ人が時の重さを感じながら動いているということでもあるのだ。私たちは、自分の家を建てる時でも、かりそめの住居としか考えない。木造の家屋ではそうとしか思えない、ともいえる。すぐ焼ける。すぐ腐る。つかの間の仮泊所でしかないわけだ。

(会田 雄次「日本の風土と文化」)

(注) オフィスガール：会社や官公庁で働く女性事務員。

※ 問題作成にあたり、本文を一部改変した。

問1 傍線部 a～e のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直せ。解答は解答用紙の所定欄に読みやすいはつきりした楷書体で書くこと。解答番号は ～ 。

a ショウド

b コシク

c ユニユウ

d 停頓

e フソ

問2 空欄 ・ に入る語として最も適当なものを、次の①～⑨のうちからそれぞれ一つずつ選べ。空欄 I の解答番号は 、空欄 II の解答番号は 。

- ① 正義 ② 定義 ③ 多義 ④ 疑義 ⑤ 異義
⑥ 二義 ⑦ 意義 ⑧ 同義 ⑨ 道義

問3 傍線部 A 「肝をつぶした」の理由として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 。

- ① 大火で多くの物を失うことになったにもかかわらず、日本人がトルコ人以上の化け物のよう
うに感じられてゾツとしたから。
② 大火で多くの物を失うことになったにもかかわらず、日本人が復興に向けた作業にいち早
く取り組んでいたから。
③ 大火で多くの物を失うことになったにもかかわらず、日本人が災禍に悲嘆することなく平
然とした様子で振る舞っていたから。
④ 大火で多くの物を失うことになったにもかかわらず、日本人が無欲恬淡にしており、日本
との貿易の難しさを感じたから。
⑤ 大火で多くの物を失うことになったにもかかわらず、日本人が災害の後始末に対して消極
的であることにゾツとしたから。
⑥ 大火で多くの物を失うことになったにもかかわらず、日本人が互いに協力することなくば
らばらに作業をしていたから。

問4 傍線部B「いわゆる上から資本主義の建設に力をそそいだ」の理由として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 9。

- ① 日本人は合理的な近代社会を運営していく能力が乏しかったため、明治政府自らが資本蓄積や興業を遂行する必要があったから。
- ② 日本人は物質に対する執着がなく、資本を蓄積していく能力を欠いていたため、明治政府が産業の振興や資本蓄積の支援をする必要があったから。
- ③ 日本人は競争意欲を欠き、生産技術に関する十分な知識を欠いていたため、明治政府が技術指導を行い産業の育成を図る必要があったから。
- ④ 日本人は物質に対する執着心が乏しく、資本主義経済の構築を嫌ったため、明治政府が強制的に資本蓄積や興業を遂行する必要があったから。
- ⑤ 日本人は自由競争の概念になじめず、生産技術を發揮することに躊躇したため、明治政府が技術を發揮する社会の構築につとめねばならなかったから。
- ⑥ 日本人は宵越しの金をもつことをいさぎよしとしない性格であったため、明治政府が資本蓄積のための環境整備をする必要があったから。

問5 傍線部C「この二人の指摘」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 10。

- ① 日本人は物質に対する執着があまりなく精神文化の程度は高いが、物質文化は劣っているという指摘。
- ② 日本人は高い精神文化を築くだけの卓越した生産技術を持っているが、物質に対する執着が妨げになっているという指摘。
- ③ 日本人は合理的な近代社会を運営する能力に乏しいため、政府が富国強兵策を強行していく必要があるという指摘。
- ④ 日本人は物をつくることは上手であるが、宵越しの金を持つことをいさぎよしとしないくらい精神的には幼いという指摘。
- ⑤ 日本人は卓越した生産技術を持っているが、物質に対する執着がなく精神文化の程度は低いという指摘。
- ⑥ 日本人は物質文化の程度については高いが、民主主義を育てていくだけの卓越した生産技術を持っていないという指摘。

問 6 傍線部 D 「それよりはるかに変わったのは執着心だろう」の理由として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 11。

- ① 物質に対するあこがれが強くなっていくなかで、このあこがれをかきおこすだけの見本が見つからなくなっていったから。
- ② 物質生活が豊かになっていくなかで、災難を受けても平気だと思えるような無欲恬淡な生き方を見失ってしまったから。
- ③ 物質に対する執着心をかきたてるほどの物質がなかったなかで、経済の発展により物質生活が豊かになったことの反動が起きたから。
- ④ 豊かな土地を背景に穀物生産力が大きくなっていくなかで、支配階級のもつ物質的富を支えていくことに耐えられなくなったから。
- ⑤ 戦後教育が進むなかで、意志の鍛練や肉体の訓練を封建的という理由により極力しりぞけてきた影響が現れてきたから。
- ⑥ 物質に対する執着が乏しかったなかで、自然災害や大戦による打撃を大きく受けたことにより物質へのあこがれが一気に生まれたから。

問 7 傍線部 E 「いわば総貧乏だった」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 12。

- ① 貧しい生活を送る農民ばかりであったということ。
- ② 武士の家屋敷は広いだけで物質的には貧しかったということ。
- ③ 支配階級も被支配階級も物質生活が貧しかったということ。
- ④ 農民も武士も精神的に豊かな生活を送る見本がなかったということ。
- ⑤ 農民も武士もともに精神的に貧しかったということ。
- ⑥ 豊かな物質生活の見本が武士にしかなかったということ。

問 8 傍線部 F 「いま一つ根本的に足りないところ」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 13。

- ① 物資を蓄積して子孫に伝えてゆくという観念
- ② 物欲を社会的に健康な方向へ舵取りする精神
- ③ 禁欲主義を説くことの白々しさを感じる達観
- ④ 物質に対する欲望をいさぎよく放棄する悟り
- ⑤ 公共財産を大切に守ってゆこうとする道徳心
- ⑥ 社会の発展を停頓させずに持続させる積極性

問9 傍線部G「物欲は決して排撃すべきものではない」の理由として最も適当なものを、次の

①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 14。

- ① 物欲そのものを退けてしまうと、公共財産に対する尊重心も失われるから。
- ② 物欲を排除してしまうと、禁欲主義を説く者達の存在価値がなくなるから。
- ③ 物欲を排除しなくても、物質的に豊かになれば物欲は自然になくなるから。
- ④ 物欲を抑えてしまうと、働こうとしない者が増えてしまうことになるから。
- ⑤ 物欲を排撃してしまうと、社会的に正しい方向に進む機会が失われるから。
- ⑥ 物欲そのものがなくなってしまうと、社会の崩壊をまねくことになるから。

問10 傍線部H「この点」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解

答番号は 15。

- ① 古い文化伝統の上に伝承を尊ぶ心が根をおろしている点
- ② 物質的な基盤そのものよりも精神の豊かさを重んじる点
- ③ 物質に対する欲望の裏返しが公共財産の尊重心である点
- ④ 伝承に値するものをつくり出して今日まで伝えている点
- ⑤ 古いという言葉が豊かであるという意味で使っている点
- ⑥ 古いという言葉が良くはないという意味で使っている点

問11 傍線部I「このようになった」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一

つ選べ。解答番号は 16。

- ① 日本人は今日まで物質への欲望を根本的に欠いてしまい、精神主義に偏重してしまった。
- ② 日本人は家具や道具、美術品、骨董品などを蓄積して子孫に伝えていこうとしなかった。
- ③ 日本人は物質の蓄積に励むだけで、日本独自の文化を全く残していこうとはしなかった。
- ④ 日本人は精神だけを伝承して、古い文化伝統の上にとっしりと根をおろすことなくきた。
- ⑤ 日本人は絵や彫刻、寺院などの建築物を大切にせず、後世に十分伝承していかなかった。
- ⑥ 日本人は物質の蓄積や財の伝承に対する観念が薄く、固有文化を伝承していかなかった。

問12 傍線部J「ヨーロッパ人が時の重さを感じながら動いているということ」の説明として最も
適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 17。

- ① ヨーロッパ人は後代に残る文化をつくるという心構えをもって、生産活動や執筆活動をしているということ。
- ② ヨーロッパ人は家屋の建設の際に自分だけではなく子孫や他人にとっても美術品に足るものであるかを意識するということ。
- ③ ヨーロッパ人は手紙を書くときでさえ、時間をむだにしないようにすることを心がけているということ。
- ④ ヨーロッパ人は鈍重に動くことの大切さを感じながら、家屋の建設や論文の執筆などに当たっているということ。
- ⑤ ヨーロッパ人は自分の行動の意味を永久という時間軸に照らして問いながら、さまざまな活動をしているということ。
- ⑥ ヨーロッパ人は「永久の品物」を残すという感覚にしたがって、「永久の家屋」を注文し設計・施工しているということ。

問13 空欄 甲 に入る小見出しとして最も適当なものを、次の①～⑧のうち
から一つ選べ。解答番号は 18。

- ① 物質的基盤と精神偏重
- ② 物資の蓄積と公共財産
- ③ 古文化財に対する尊重
- ④ 物資の蓄積を欠く観念
- ⑤ 文化伝統を守る日本人
- ⑥ 古いという言葉の意味
- ⑦ 欲しい固有文化の伝承
- ⑧ 日本人に欠落する物欲

問14 本文の内容に合致するものを、次の①～⑨のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は ・ 。

- ① 幕末、明治初めのころの日本は、豊かな物質文化の見本が未だ存在していなかったため、空襲を受けて焼けだされたにもかかわらず、そのことを惜しいと思う者は誰もおらず、災難を受けても精神の打撃は少なかった。
- ② 日本では「お父さんは古い」というような使われ方をしているが、もともと日本語の「古い」という言葉には「よい」という意味が込められており、そのことはウイスキーのオールドという言葉を考えれば容易に実感できるはずである。
- ③ 農民人口に対して五～六％の比率にのぼる徳川時代の武士を日本の農民が背負うことができた理由としては、日本の土地が豊かで穀物生産力がヨーロッパよりも高かったことや日本の農民が辛抱強かったことが挙げられる。
- ④ ヨーロッパではおばあさんの、そのまたおばあさんの花嫁衣裳が最も縁起がよく貴重なものとして子孫に伝承されていくが、花嫁衣裳だけでなく指輪や家具も同じように伝承されており、いずれも美術品として扱われる傾向が強まっていく。
- ⑤ 有名なドイツ人の医学者ベルツ博士は明治九年十一月に東京で起きた大火の焼け跡を視察して、日本人が意気阻喪していない様子に驚いたが、ベルツ博士はそこに日本の精神文化の低さと物質文化の程度の高さを見いだした。
- ⑥ みんなが欲望のない聖人君主になってしまうようなことは起こりえないと信じているがゆえに安心して禁欲主義を説く坊主や聖職者は、自らは働いていないにもかかわらず、欲望を排すべきだという演説を無責任にも行っている。
- ⑦ ヨーロッパでは自分だけでなく子孫や他人にとっても家屋は永久の住居であり集合所や生産場であるという強い意識のもとで家屋をたてるが、日本では家屋をかりそめの住居としか考えずたてており、その意味では日本の家屋は不動産とはいいがたいものである。
- ⑧ 幕末・明治期日本の卓越した観察者であったドイツの医学者ベルツ博士とイギリスのオルコック公使が示した客観的な意見の重要性に気づいた明治政府は、富国強兵策を強行し、国家が強力に資本家を援助するいわゆる上から資本主義の建設に注力した。
- ⑨ 「子孫のため美田を買わず」は今日でも美談であるが、物に対する執着心が敗戦後は一層目立つようになってくる一方で、物資を蓄積して財を子孫に伝承していくという観念は薄いままである。

II

次の文章を読んで、後の問い（問1～13）に答えよ。（配点 75）

職業人養成とその乾燥

甲

近代大学における教育の第一の潮流は専門的な職業人の養成のための教育である。中世の大学においてはすでに聖職者（教会官僚）の養成のための神学、官僚・法律家の養成のための法学、そして医者^aの養成のための医学、の三つが大学教育の主要な機能であった。しかしすでに十七、十八世紀から社会経済は新しい機能を加え始めていた。近代国家の誕生とともに、伝統的な高度専門職に加えて、さらに工学や農学などの分野での専門職業人が、はじめは官僚として、後には民間企業に所属する職業人として必要とされ、その養成が大学その他の高等教育機関の重要な機能の一つとなったのである。さらにそうした職業の幅は拡大した。

近代国家の論理^Bがもつとも端的に大学に適用されたのがフランスにおいてであった。フランス革命はまず大学を徹底的に破壊することから始まった。大学はまず旧体制の王権、そしてカトリックという権力と一体化していたとともに、旧体制の社会的な既存権力の甲殻となっていたギルドの一つであったからである。他方でコンドルセによる教育改革^aコウソウにあらわされるように、フランス革命は壮大な国民教育の体系を描いていた。それは結局ナポレオンによって紆余曲折を経て具体化されていくのであるが、その結果としてフランスの教育体系は事実上、二つの部分からなることになった。

第一は国民教育の体系であつて、小学校、中等学校、そして高等教育を擁する。この体系において「大学」（university）とは、この体系の頂点にあるとともに、この体系全体を示す言葉となった。自律的な個別組織としての大学は存在せず、個別の学部（faculty）が存在し、大学の学長は教育体系全体を監督する。

第二は国家の機能をに^Iなる官僚の養成機関である。近代国家は同時に国家であつたから、工兵学校が重要な位置をしめ、さらにそれが一般的な工学教育を行う、理工学校（*école polytechnique*）へと発展した。さらに人文社会科学における高度の教育も、中等教育機関あるいは大学の教員養成機関としての高等師範学校によって行われるようになった。近代国家は同時に新しい産業と技術を担っていたから、これらの機関は政府のそれぞれの業務を担当する^bアジヨによって運営され、その学生は政府の補助を受けた。卒業生は後の民間企業を支える人材ともなっていた。またこれらの機関は同時に少数のエリートを選抜する機関にもなったのである。

すでに旧体制下において、学士院が研究機能を主に担うようになっていた。これを考えると、フランスの高等教育は、研究機関、一般的な高等教育機関、そして専門職業教育が分離され、さらに職業教育機関が専門別に分離していた点に大きな特徴があつたといえよう。これは近代産業の分業の原理をセイゼンとした教育体系に対応させたといつてもよい。こうした教育体系のあり方は、後にロシアに、さらに社会主義国に受け継がれることになる。

ポリテクニク・モデルの影響

こうした職業人教育、とくに工業分野でのポリテクニク・モデルは他諸国に大きな影響を与えた。アメリカにおいては、十九世紀前半にランセラー工業大学 (Ranseller Polytechnic Institute) が、さらに一八五六年にはマサチューセッツ工科大学 (Massachusetts Institute of Technology) が設置され、ポリテクニクの英語訳として Institute of Technology が定着した。さらにドイツなどでは大学とは別に工科大学が設立された。さらに工業化の発展とともに、短期高等職業教育機関としてイギリスのポリテクニク、ドイツの専科大学 (Fachhochschulen)、などが生まれることになった。

ところで専門職業教育機関の教育内容はいうまでもなく、著しく専門的であり、また実践に即したものであった。それにはフランスの中等教育機関においてすでに基礎的な教育が施され、その修得を厳しく試験したうえで入学が許されるという条件もあった。専門職業の論理にもとづいた体系的なカリキュラムが作られ、それにもとづいて厳格な試験が行われ、それらを基礎として進級、さらに卒業が許される。そしてそうした訓練を経たことが職業・卒業資格によって証明される。一方において学生に対しては明確な修得すべき知識のセットを設定すると同時に、それに耐えたことが、職業人として高い能力を示すと考えられたのである。

こうした職業教育のあり方は、一方において実践的な職業人を形成するうえで効率的な形態であったが、他方で学生に知識の機械的な修得を強いる半面で、自律的な知的探求を阻む、乾燥したのもでもあった。そこから大学教育の名に値しないという批判も生じる。ドイツの大学が中世以来の医学、法学、神学を例外として、近代的な職業教育を大学に導入することを二十世紀初頭まで拒否していたことはそれを端的に物語る。

「リベラル・アーツ」教育とその誤解

探求的志向と古典志向

第二の、そしてある意味ではもつとも古い起源をもつ潮流は、リベラル・アーツである。しかしまたそれは同時に、きわめて多様な解釈、あるいは誤解をされてきた言葉でもあることに留意しておかねばならない。

リベラル・アーツの源流は、紀元前のギリシア、とくにアテネにさかのぼることができる。その自由市民階級 (liberal) のために必要な知識技能 (artes) がリベラル・アーツの原初的な意味であった。そうした伝統はさらに、ローマ時代を通じて中世ヨーロッパに受け継がれ、言語三科 (文法、修辭学、弁証法) および数学四科 (算数、音楽、幾何、天文学) からなる自由七科の構成が確立されたのは五世紀だという。そうした教育はさらに十二世紀の大学の教育内容になっていった。

中世大学における自由七科は、三つの意味をもっていたといえよう。一つは前述のように法学、神学、医学の **Ⅱ** 教育に進む前の準備教育であった。第二にその内容は、具体的には歴史や自然科学のノウハウを含むものであり、広い分野での知識を与えるものであった。第三に富裕階級の教養としての意味である。いずれにしても、その内容は多岐にわたっていた。

ところでリベラル・アーツの歴史をガイカンしてアメリカの高等教育史の専門家であるキムボ

ル (Kimball) は、リベラル・アーツにはギリシアにおけるその淵源⁸から今日に至るまで、二つの異なる流れがあるという。

その一つは探求志向である (これをキムボールは「哲学者」〔philosopher〕の志向と呼んでいる)。ソクラテス・プラトンに始まるこの伝統においては、**ア**、検証することによって真実に近づくことが学問の真髓であり、またそれが青年を善に導く唯一の方法でなければならなかった。

これと対極にたつのが古典志向である (キムボールはこれを「雄弁家」〔orator〕の伝統といっている)。ソクラテス (436 - 338B.C.) に始まるこの伝統においては古典こそが世の中の真実に立脚するものであり、探求的⁹な志向は人間の思考をメイソウさせるにすぎない。古典を学習することによって学生は、知識階級の間でのコミュニケーションに必要な知識と考え方を身につけるだけでなく、民主主義的¹⁰社会のリーダーとして人に訴える能力を身につけることができる。こうした意味でリベラル・アーツはまさに選良の学問であった。

2

これらの二つの伝統は必ずしも相互に排他的なものではないが、長期的にみればその相対的な影響力の大きさには変化があった。実際の教育内容の面からいえば、ローマ帝国以降では主流となったのはむしろ古典志向であり、その後のヨーロッパにおいてもその傾向は続いた。しかし十二世紀になって、探求志向が再び力を得て、これが知的ダイナミズムの上での大学の勃興の基盤となったのである。しかしその後の宗教改革を契機として大学は再び古典志向を主流とするようになる (Kimball)。

こうした流れの中で古典志向のリベラル・アーツが独自の展開をみせたのがイギリスの大学においてであった。オックスフォード、ケンブリッジの両大学が建設されたのは十三世紀であるが、その後、イギリスの社会経済環境の中でその組織と教育は独自の変化をとげた。すなわち学生の宿泊施設が国王や卒業生の寄付などによって次第に独自の資産を蓄積し、充実した施設を備えるとともに、年長の学生や教師を抱えて、教育機能¹¹をもち始めた。これがカレッジ (College) である。

その後、しだいに大学はカレッジに教育機能を委譲していき、大学全体の教育機能は一部の講義、学位の認証に要する試験に過ぎなくなった。こうしたカレッジの発達¹²の背後には十六世紀以降には従来の貴族に加えて、商人などが富裕層を形成し、その子弟を大学に送り始めたことがある。それは必ずしも専門職の訓練に結びつく必要のない教育への需要を形成すると同時に、それに要する高いコストを負担することを可能とした。こうした条件を得て、カレッジの中で教師 (tutor) が学生に個人指導を行う教育の形式が発展したのである。**III** 的な教育契機としての「対話」が、こうした形で復活したともいえよう。

大学での授業内容は神学に関しては講義の形で残ったが、法学はしだいに大学の外の専門職機関に、医学においても大学の外にしだいに移っていった。カレッジにおける教育内容の中心となったのは自由七科であったが、それは単なる準備教育ではなく、たとえば修辞学の学習はキケロなどの作品の講読であって、文学や歴史学に連なるものであったし、算数、天文学などは近代の自然科学に連なる可能性をもつものであった。こうした形でカレッジは学術的な空間を形成していったので

ある。

しかし半面でその基本的な姿勢は上述の古典志向にあり、^gそれ自体が学術的な発展をめざす力を欠いていた。カレッジの自足的な文化が知的停滞を生む傾向にあったことも指摘されている。

十七、十八世紀にはガリレイ (1564-1642)、ニュートン (1642-1727)、ロック (1632-1704)、など現代の自然、社会科学に連なる知的活動が胎動し始めたが、そのほとんどは大学の外での出来事であっただけでなく、大学はそうした動きを取り入れるのにも消極的であった。十九世紀になってようやくイギリスの大学はそうした動きを取り入れざるを得なくなった。

このような状況の中で、古典志向のリベラル・アーツ教育を、近代的な科学的探究の論理とどのように適合させていくかが問われることになった。イギリス、そしてアメリカの大学の十九世紀後半から二十世紀にかけての基本的な課題は、この問題にどのように答えるかにあったといつて過言ではない。結果としてイギリスとアメリカの大学はそれぞれ異なった方向で、その理念、教育組織そして教育のプラクティスの変容を進めていった。

古典志向と現代的な学術的探究への志向の間の複雑な関係が、いわゆる「リベラル・アーツ」教育の理解を困難にさせ、また誤解を生じさせてきたのである。

(金子 元久「大学の教育力―何を教え、学ぶか」)

※ 問題作成にあたり、本文を一部改変した。

問 1 傍線部 a ～ g のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直せ。解答は解答用紙の所定欄に読みやすいはつきりした楷書体で書くこと。解答番号は ～ 。

a コウソウ

b ブシヨ

c セイゼン

d ホウガ

e 多岐

f ガイカン

g メイソウ

問 2 空欄 **I**、**II**、**III** に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑧のうちからそれぞれ一つ選べ。解答番号は **28**・**29**・**30**。

I ① 法治 ② 民族 ③ 自由主義 ④ 民主主義
⑤ 軍事 ⑥ 商業 ⑦ 資本主義 ⑧ 知的財産 **28**

II ① 個別 ② 特殊 ③ 基礎 ④ 官僚
⑤ 実践的 ⑥ 自律的 ⑦ 探求的 ⑧ 専門職業 **29**

III ① 中世 ② 近代 ③ 現代 ④ 革新
⑤ 原初 ⑥ 原理 ⑦ 社会 ⑧ 雄弁 **30**

問 3 空欄 **A** に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は **31**。

- ① 既存の知識を徹底的に疑い
- ② 確実な知識も徹底的に疑い
- ③ 確実な知識も徹底的に排斥し
- ④ 既存の知識を徹底的に否定し
- ⑤ 青年の行動を徹底的に観察し
- ⑥ 不確実な知識を徹底的に観察し

問 4 傍線部 A「そうした」の品詞の名称として最も適当なものを、次の①～⑧のうちから一つ選べ。解答番号は **32**。

- ① 動詞
- ② 形容詞
- ③ 形容動詞
- ④ 名詞
- ⑤ 副詞
- ⑥ 連体詞
- ⑦ 助詞
- ⑧ 助動詞

問5 傍線部B「端的に」の意味として最も適当なものを、次の①～⑧のうちから一つ選べ。解

答番号は

33

。

- ① 詳細に
- ② 正確に
- ③ 如実に
- ④ 婉曲えんきよく的に
- ⑤ 絶対的に
- ⑥ 徹底的に
- ⑦ 名実ともに
- ⑧ はつきりと

問6 傍線部C「大学教育の名に値しない」の理由として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は

34

。

- ① 大学は、専門職業人を育成するための場所ではないから。
- ② 大学は、専門的かつ総合的な知識を修得する場所であるから。
- ③ ポリテクニク・モデルは、理論を軽視し、実践に偏重しているから。
- ④ ポリテクニク・モデルでは、知識の機械的な修得だけを目指しているから。
- ⑤ ポリテクニク・モデルの職業教育のあり方は、自律的な知的探求を阻む面があるから。
- ⑥ ドイツの大学が二十世紀初頭まで職業教育の大学への導入を拒否していたから。

問7 傍線部D「ある意味では」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は

35

。

- ① 古典志向であるという意味では
- ② 探求志向であるという意味では
- ③ 紀元前のギリシアにさかのぼることができるという意味では
- ④ 自由七科の構成が確立されたのが五世紀であるという意味では
- ⑤ ポリテクニク・モデルの大学が近代に創設されたという意味では
- ⑥ オックスフォード、ケンブリッジ大学の建設時期が十三世紀であるという意味では

問 8 傍線部 E 「カレッジ」の説明として適当ではないものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。

解答番号は 36。

- ① 教育内容の中心となったのは自由七科であった。
- ② 古典志向を基本姿勢としつつも、教育契機としての「対話」が復活したことがあった。
- ③ 学生の宿泊施設が国王や卒業生の寄付などによって次第に独自の資産を蓄積し、充実した施設を備えるとともに年長の学生や教師を抱え、教育機能をもち始めた。
- ④ ローマ帝国以降では主流となったのは古典志向であったが、十二世紀になると探求志向が再び力を得て、宗教改革を契機として再び古典志向を主流とするようになった。
- ⑤ 十六世紀以降、貴族に加え商人などが富裕層を形成し、その子弟を大学に送り始めたことが発達の要因となった。
- ⑥ 教師が学生に個人指導を行う教育の形式が発展した。

問 9 傍線部 F 「自由七科」に含まれるものを、次の①～⑧のうちから一つ選べ。解答番号は

37。

- ① 哲学 ② 神学 ③ 歴史学 ④ 代数学
- ⑤ 美学 ⑥ 医学 ⑦ 天文学 ⑧ 社会学

問10 傍線部 G 「それ自体が学術的な発展をめざす力を欠いていた」の理由として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 38。

- ① カレッジが文学や歴史学、近代の自然科学に連なる可能性をもつ自由七科を教育内容の中心にした学術空間を形成しながらも、古典志向においては探求的な志向は人間の思考をメイソウさせるにすぎないと考えられていたために、カレッジの学生は読書しかしなくなってしまうから。
- ② カレッジが文学や歴史学、近代の自然科学に連なる可能性をもつ自由七科を教育内容の中心にした学術空間を形成しながらも、古典志向においては探求的な志向は人間の思考をメイソウさせるにすぎないと考えられていたために、カレッジの学生は現実の社会や自然現象の解明に全く興味を持ってなくなってしまうから。
- ③ カレッジが文学や歴史学、近代の自然科学に連なる可能性をもつ自由七科を教育内容の中心にした学術空間を形成しながらも、古典志向を基本姿勢としたために、カレッジの学生は外部の人たちと積極的に交流しようとしなくなってしまうから。
- ④ カレッジが文学や歴史学、近代の自然科学に連なる可能性をもつ自由七科を教育内容の中心にした学術空間を形成しながらも、古典志向を基本姿勢としたために、現代の自然、社会科学に連なる知的活動を積極的に取り入れようとはしなかったから。
- ⑤ カレッジが文学や歴史学、近代の自然科学に連なる可能性をもつ自由七科を教育内容の中心にした学術空間を形成しながらも、古典志向を基本姿勢としたために、ガリレイ、ニュートン、ロックなどの優秀な人物がカレッジに入学してこなかったから。
- ⑥ カレッジが文学や歴史学、近代の自然科学に連なる可能性をもつ自由七科を教育内容の中心にした学術空間を形成しながらも、古典志向においては探求的な志向は人間の思考をメイソウさせるにすぎないと考えられていたために、カレッジでは探求的志向が蔑視されていたから。

問11 空欄 甲 に入る小見出しとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 39。

- ① 近代国家と官僚養成
- ② 国民教育と官僚養成
- ③ フランスの国民教育
- ④ 職業人養成と大学改革
- ⑤ エリート養成とフランス革命
- ⑥ 国民教育の頂点としての大学

問12 空欄 乙 に入る小見出しとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 40。

- ① リベラル・アーツの歴史的意義
- ② リベラル・アーツの社会的意義
- ③ リベラル・アーツの現代的意義
- ④ リベラル・アーツの現在の課題
- ⑤ リベラル・アーツの社会的受容
- ⑥ リベラル・アーツの歴史的展開

問13 本文の内容に合致するものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 41。

- ① 言語三科と数学四科からなる自由七科の構成が確立されたのは五世紀であるが、中世の大学において自由七科は、法学、神学、医学を学ぶ前の準備教育、歴史と自然科学を幅広く学ぶ一般教養、そして富裕階級の教養という二つの意味をもっていた。
- ② 古典志向のリベラル・アーツが独自の展開をみせたのはイギリスのカレッジにおいてであったが、十三世紀に建設されたオックスフォード、ケンブリッジを含めてカレッジは、十六世紀以降、神学、法学、医学に関する講義をすべて大学の外の専門機関に委譲していき、講義内容としては自由七科だけが残った。
- ③ リベラル・アーツの源流は紀元前のギリシアにさかのぼることができるが、今日に至るまでリベラル・アーツには、ソクラテス・プラトンに始まる探求志向とイソクラテスに始まる古典志向という、二つの異なった流れがある。
- ④ 近代大学における教育の第一の潮流は専門的な職業人養成のための教育であったが、その結果としてフランスの教育体系は事実上、国民教育の体系と国家の機能をなす官僚の養成機関という二つの部分からなることになった。
- ⑤ ポリテクニク・モデルは工業化の発展とともにアメリカ、ドイツ、イギリスなどの国々に大きな影響を与えたが、その教育内容は実践的な職業人を育成するためのもつとも効率的な形態であり、全面的に賞賛され、ロシアにまで影響を与えた。
- ⑥ 近代国家の論理がもつとも端的に大学に適用されたフランスでは、すでに中等教育機関において専門職業の論理にもとづいた体系的なカリキュラムが生まれ、大学においても修得すべき知識のセットが明確に設定されていたため、就職に有利な教育体制が整っていた。